

# 水辺の生物



## タシギ

チドリ目シギ科

写真提供・校閲：我孫子市鳥の博物館

**尾**の短いずんぐりした体に、体の割に長いまっすぐなくちばしをもつタシギ。くちばしを泥に深く突っ込んだまま、せわしなく上下させてえさを探り当てる。写真のタシギは食事の真っ最中なのだろう。安全な場所では日中もよく活動するが、昼間は草むらに隠れ、主に夜間に採食する。

近縁のチドリ類は視覚をたよりにえさを探すので、くちばしの形態分化の幅が狭いのに対し、くちばしの感触でえさを探すシギ類は、くちばしが多様に分化している。上に反り返ったもの、下に湾曲したもの、タシギのように体の割に長いものなどさまざまなタイプがいる。昆虫の幼虫、ミミズ、小型の甲殻類、小型の軟体動物など、泥にもぐっている小動物がタシギの主なえさとなる。

和名は田でよく見かけることに由来。9月上旬～11月下旬に旅鳥、冬鳥として日本各地に飛来する。水田、休耕田、川岸など、内陸の草の生えた湿地などで暮らし、草のない開けた水面に出ることを嫌う。頭から背中にかけての黄白色の縞模様が、枯れ草に似た保護色となっており、冬場の草地などにいるときのカムフラージュになる。タシギは狩猟対象種となっているが、見つけるのが難しそうである。ちなみに、英語のsnipe(狙撃)は、タシギの英名common snipeが語源だという説がある。狙撃手から身を守るすべを心得ているとでもいうのだろうか。驚いて飛び立つときに、しばらく低くジグザグに飛ぶのがタシギの特徴だ。それを撃ち落せる腕を持つのがスナイパーだとされたのであろう。

タシギには、オオジシギ、チュウジシギ、ハリオシギなど姿かたちがそっくりな近縁種があり、野外での識別が非常に難しいとされる。飛翔時に、次列風切(広げた翼の付け根から中央付近までの羽)の後端が白く目立つ、頭部に対するくちばしの割合がこれら近縁種のなかで一番長く見える、尾羽が通常14枚あることなどが見分けの際の重要なポイントだ。体長は27cm。くちばしの先から尾の先までの大きさがハトくらいである。

ユーラシア大陸と南北アメリカ大陸の北部地域に繁殖地を持ち、4～7月に通常4個の卵を産む。メスだけが抱卵し、17～20日程度でふ化。オスは先にふ化したヒナを連れて巣を出て行き、メスは後からふ化したヒナを担当し、雌雄分担して子育てをするという。ヒナは3週間足らずで飛べるようになる。

参考文献：『日本動物大百科3』平凡社 1996年刊、『原色日本野鳥生態図鑑・水鳥編』中村登流他著 保育社 1995年刊 ほか